

大死霊魔術師ゾーラスター。

古い書物から近代の記録に至るまで、頻度は多くないものの、さまざまな文書にその名が散見される。

彼……あるいは彼女は、人間離れした超越的な魔力を有しており、死者をゾンビやグール、マミーやヴァンパイアのようなアンデッド・モンスターとしてではなく、まるで生前と変わらないような外見とあたたかい体をもつ、ただし術者であるゾーラスターに対して非常に従順な存在として蘇生させることができるのだという。

屍に「生命の種」と呼ばれる奇妙な触媒を植え、反魂の儀を行うことで、死者は蘇る。

強く請われて、あるいは特に強力な召喚術者に要請されることで、その力をもって蘇生を引き受けたこともあると記録されているが、そのような場合には必ずある種の契約による代償や召喚の対価を求めたらしい。

それ以外では己が復活させた者以外の他者とはあまり関わりをもたず、その時々で数の変わる従者たちを引き連れて、あるいは一人だけで、自分の関心事に没頭し続けていると伝えられている。

そうして時代を越えて存在し続けるゾーラスターの正体は、よくわかっていない。

資料によって性別さえもまちまちで、かつて稀代の召喚術師によって招請され、物質界に興味を抱いてそのまま滞在し研究生活を続けている大悪魔であるとも、悪魔の血を引くカンビオン（ハーフデヴィル）であるとも噂されている――。

-----

「ふむ……」

ゾーラスターは足の赴くままに新しい地方を訪れると、まずは目立たない場所に魔法具を用いて当面滞在するための住居を構え、連れてきた従者をそこで待たせた。

それから、その地にある墓地を目指す。

ひとまずは死体が消えたからといってあまり騒ぎにもならぬであろう、貧者のための共同墓地に。

「なかなか、いい雰囲気のところだ」

ゾーラスターは軽く周囲を見渡して墓所に漂う土と黴の香りを吸い込みながら、そう独りごちた。

黄昏が迫る中、足元には薄い霧が漂い、無数の墓石が静寂を保っている。

彼はゆるゆると歩を進めた。

目的は明確だ。

新しい地に着けばまず新しい従者を手に入れることで、現地についてそこに住んでいた者の口から学ぶのが彼の旅の習慣だった。

そうして小高い丘の上にある墓地を歩き回るうちに、掘り返されたばかりの土を見つける。

そこには簡素な石の墓標が立ち、新たに埋葬されたばかりの誰かを示していた。

「よさそうだな」

ゾーラスターは薄く笑みを浮かべると、墓の下から響いてくるような重々しく低い声で呪文を唱え始める。

まずは、通りすがりの誰かに見られていらぬ騒ぎを起こさないために、人払いの結界を張った。

次いでもう一つの呪文を詠唱すると、それに伴って付近の地面が震えだし、まるで意思を持つかのように土が左右に割れていく。

その奥から簡素な木棺が音もなく浮かび上がるようにして地表に現れると、手を伸ばしてその蓋を開いた。

中には、若い女性の遺体が横たわっている。

埋葬の際についたのであろう泥が付着しているが、その髪にも顔貌にも、まだかつての美しさの面影が残っていた。

「うむ……悪くない」

ゾーラスターはざっと死体を検分して、小さく頷いた。

まだ瑞々しさを失いきっていない鮮やかな赤毛や褐色の肌の状態は、死体はかなり新しく、新鮮であることをあらわしている。

「皮膚には、多少の病変の痕跡があるようだが……。この程度ならば、問題にはなるまい」

死体はたとえ傷んでいようとも復活の過程で生者と変わらぬ姿に復元されて蘇るが、その死体から情報を得たい場合には、無傷であることや新しいことは重要な要素になる。

状態のいい新しい死体は生前の記憶や個性をほぼ完全な状態で保持していることが多いが、状態の悪い古い死体では記憶や個性のほとんどが失われ、下等なアンデッドの従僕と大差ない存在になる場合も多い。

ゾーラスターは腰のポーチから小さな容器を取り出し、そこに入った「生命の種」と呼ばれる物質を彼女の胸元に植え付けた。

低く重々しい、まるで墓の下から響くような声で呪文を唱えるに従って、周囲の空気が震え、遺体が微かに動く。

見る間にその肌には瑞々しさと生気が戻り、閉じていた瞳が緩やかに開かれた。

「——う……ここは……？」

女性は戸惑いの表情を浮かべながら、少しぼうっとした様子で体を起こした。

彼女をじっと見下ろし、観察するゾーラスターに気付く。

「あなたは……？」

ゾーラスターは淡々と答えた。

「ここは墓地だ。私はゾーラスター。君は蘇ったのだよ」

その声に女性は一瞬目を見開いたが、すぐに周囲を見回して現状を理解したように小さく頷いた。

「そう、なんだ。魔法ってやつよね」

彼女はぐっと伸びをして確かな足取りで立ち上がり、簡素な木棺の縁に腰をかける。

「魔術師なんて見たのも初めてよ。あたしには魔法なんて大層なものことはぜんぜんわからないけど……、すごいよね」

素直な感想を漏らすと、手を軽く振りながら自己紹介を始めた。

「あたし、キルケっていうの。……なんだか、不思議とあなたに従わなきゃいけないって感じがするのよねえ。もしかしてこれも、魔法の力だってことなのかしら？」

そう言ってゾーラスターの顔をじっと見ながら、首を傾げる。

「まあ、そういうものだと思ってくれていい」

ゾーラスターは表情を変えずに、冷静に彼女の様子を観察した。

「その様子からすると、どうやら君には生前の記憶や個性が十分に残っているようだな」

「残ってないこともあるの？」

「死体が古い場合にはよくあることだが。屍だったときの状態から判断すると、君は死んでからまず数日と経ってはいないようだな。まあ、順当なところだろう」

「そう」

キルケは少し苦笑しながら、辺りを見回す。

「身内に会いたいのか？」

ゾーラスターの問いに、首を横に振った。

「いないわ。あたしは孤児院出身の、身寄りのない娼婦よ。生きてた時はそれなりに客の男たちにちやほやされてたもんだけど、死んで冷たくなった女には誰も興味ないみたい。ま、抱き心地も悪いでしょうしね」

彼女は先ほどまで自分が入っていた粗末な木棺、何の副葬品も入っていないその内側、自分の名前だけが刻まれた花ひとつ備えられていない簡素な墓石などを見て、乾いた声で自嘲気味に笑った。

「せっかく生き返らせたのに、大した女じゃなくてがっかりした？」

ゾーラスターは首を横に振る。

「いや、興味深い。君のことやこの地方のことについて、もっと教えてもらいたい」

キルケは少し考えるように目を細めると、肩をすくめた。

「ま、時間はたっぷりあるわよね。あとはもう、ずーっと寝てる予定しかなかったわけだし。いいわよ。あたしの知ってることくらいなら、いくらでも話してあげるわ」

ゾーラスターはその言葉に満足げに頷くと、彼女の手を引いて立ち上がらせた。

「では、場所を変えて話すでしょう。いつまでもこんな場所で話し込んでいるものでもあるまい。ぬくもりの戻った体が冷えるだろう」

「どこへ行くの？」

「私の家だ。つい先ほど用意したばかりだがね」

そう言うと、もう一度呪文を唱えて棺を元のように埋め戻し、歩き始める。